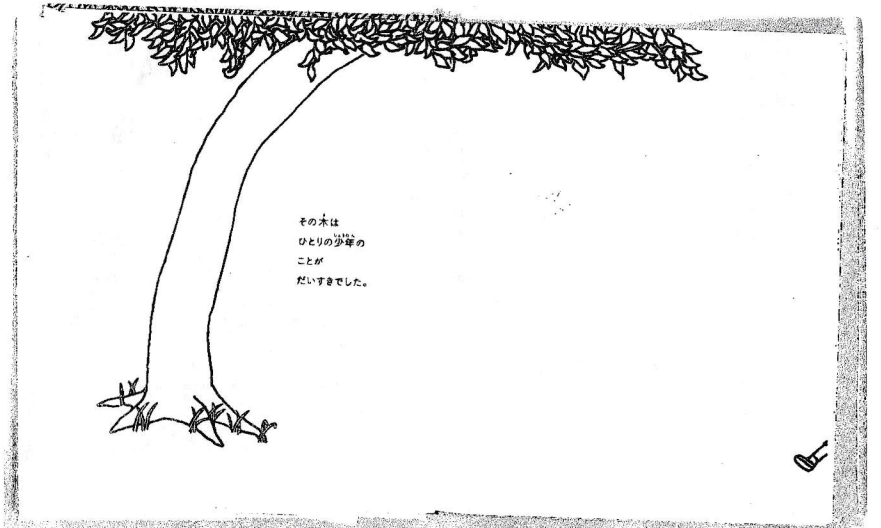
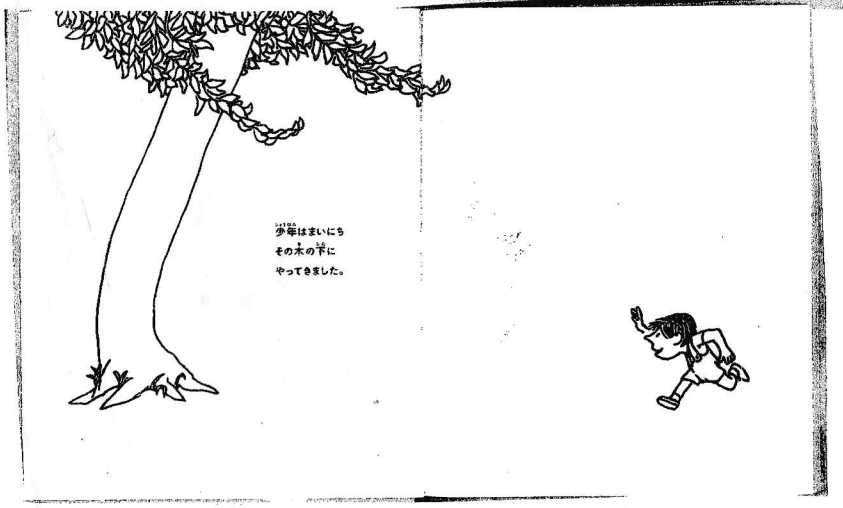
おおきな木

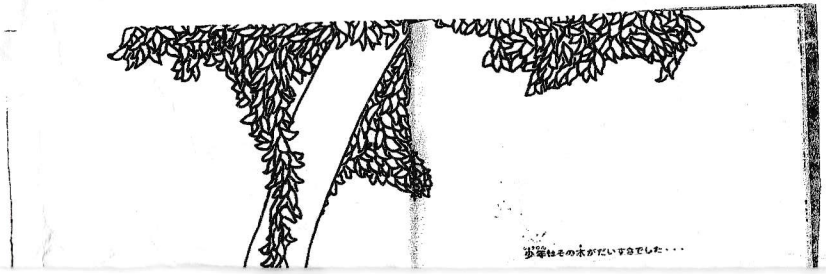
シェル・シルヴァスタイン
村上春樹訳



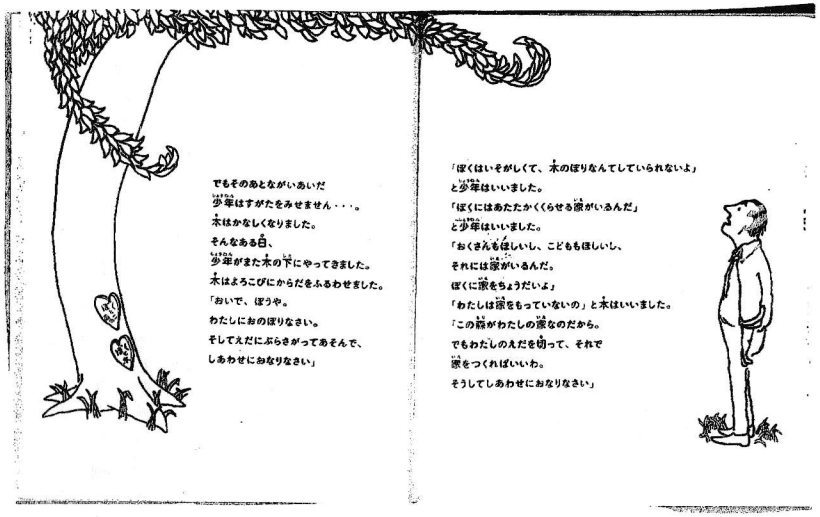
その木は
ひとりの少年の
ことが
だいすきでした。



少年はまいにち
その木の下に
やってきました。



少年はその木がだいすきでした・・・



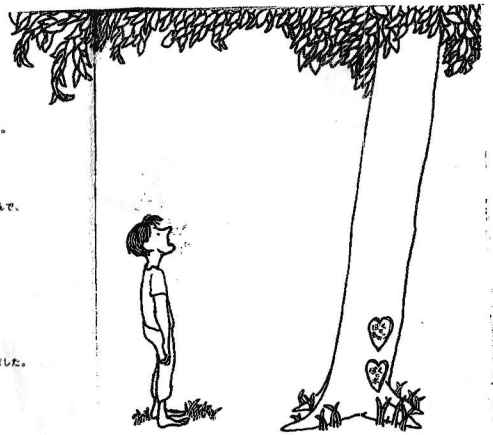
でもそのあとながいあいだ
少年はすがたをみせません・・・。
木はかなしくなりました。
そんなある日、
少年がまた木の下にやってきました。
木はよろこびにからだをふるわせました。
「おいで、ぼうや。
わたしにおのぼりなさい。
そしてえだにぶらさがってあそんで、
しあわせにおなりなさい」

「ぼくはいそがしくて、木のぼりなんてしていられないよ」
と少年はいいました。
「ぼくにはあたたかくくらせる家がいるんだ」
と少年はいいました。
「おくさんもほしいし、こどももほしいし、
それには家がいるんだ。
ぼくに家をちょうだいよ」
「わたしは家をもっていないの」と木はいいました。
「この森がわたしの家なのだから。
でもわたしのえだを切って、それで
家をつくればいいわ。
そうしてしあわせにおなりなさい」

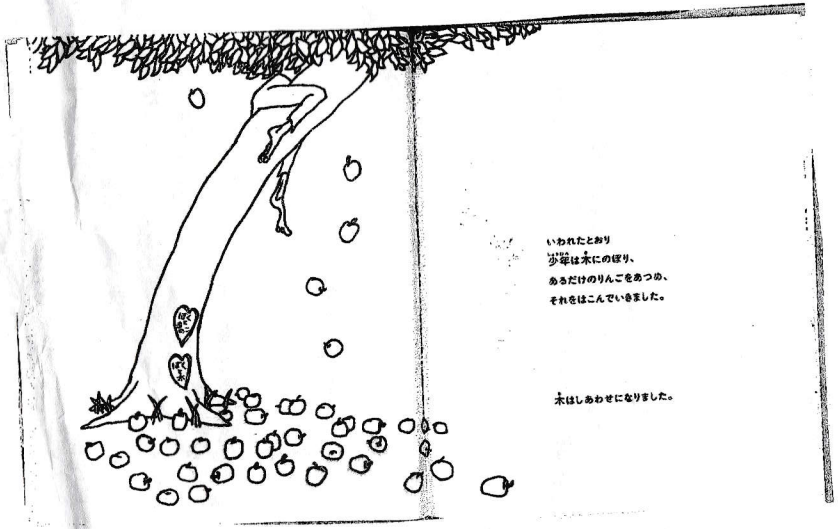
少年はいわれたとおり
木のえだを切り、
それをはこんでいって
家をつくりました。

でもそのあとながいあいだ
少年はすがたをみせませんでした。
少年がまたもどってきたとき、
木はこころからしあわせでした。
それこそもうくちもきけないくらい。
「いらっしゃい、ぼうや」と木はささやきかけました。
「楽しくあそびましょう」
「ぼくはあそぶにはとしをとりすぎているし、
こころがかなしすぎる」と少年はいいました。
「ぼくはふねがほしい。
ここじゃないずっととおくに
ぼくをはこんでくれるふねが。
ぼくにふねをおくれよ」

「わたしのみきを切って
ふねをつくりなさい」
と木はいいました。
「それにのってとおくにいって・・・
しあわせにおなりなさい」



そしてある日、少年が木の下にやってきました。
木はいいました。
「いらっしゃい、ぼうや。わたしに
おのぼりなさい。えだにぶらさがって、
りんごをおたべなさい。わたしのこかげであそんで、
しあわせにおなりなさい」
「もう木のぼりをしてあそぶとしじゃないよ」
と少年はいいました。
「ものを買ってたのしみたいんだ。
おかねがいるんだよ。
おかねがなくっちゃ。
ぼくにおかねをちょうだい」
「ごめんなさい、おかねはないの」と木はいいました。
「わたしにあるのは、ほっぱとりんごだけ。
りんごをもっていきなさい、ぼうや。それを
まちでお売りなさい。そのおかねで
しあわせにおなりなさい」



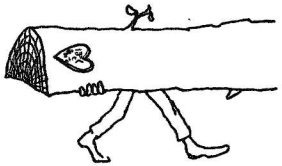
いわれたとおり
少年は木にのぼり、
あるだけのりんごをあつめ、
それをはこんでいました。

木はしあわせになりました。

いわれたように少年はみきを切りたおしました。

それで木はしあわせに・・・

それでふねをつくり、とおくにたびだちました。



なんてなれませんよね。

「ぼくはもう、とくになにもひつようとはしない」
と少年はいいました。
「こしをおろしてやすめる、しずかなばしょがあれば
それでいいんだ。すいぶんつかれてしまった」
「それなら」と木はいいました。そして
できるだけしゃんと、まっすぐからだをのばしました。
「ふるい切りかぶなら、こしをおろして
やすむにはぴったりよ。
いらっしゃい、ぼうや、わたしにおすわりなさい。
すわって、ゆっくりおやすみなさい」

少年はそこにこしをおろしました。

訳者あとがき

絵本『おおきな木』はアメリカで1964年に出版され、それ以前合せると中に三十冠上の言語に翻訳され、世界各地の人々の手に取られたロングセラーです。世代から世代へと大切に読み継がれてひとと言ってもいいでしょう。

この物の絵と文章を作ったシェル・シルヴァスタイン（1930-1999）には『ぼくを探して』（1974）などの手法性の詩の著作が多くありますが、それ以外にも様々な方面にすぐれた腕をふるった人です。絵野連人名山の中の絵師　イラストレーターとして出版したのですが、作品の挿画を描く切り絵の中にを出ぬ。また作詞作曲家、ミュージシャンとしても広く知られています。ヒット・ソングをたくさん手がけ、グラミー賞までもっています。こうなると字が多趣なのわかりませんね。

本人の話によれば、とくに子供向けの本を書くつもりはなかったのですが、出版社の担当編集者に「あなたならぜったいに読ませるいいのが書けるよ」と励まされ、冗談半分、気乗りしないまま書き始めたようです。やがてその人と子供向けの本を書き続けているところをみると、作っているうちに「こういう本を書くのも、作っているのからも」と思い直したのかもしれません。その編集者には感謝するべきなのようですね。

この『おおきな木』を読まれるとわかりにくいなると思いますが、シルヴァスタイン自身として子供に対してわかりやすい「寓話」を作っているわけではありません。物語は単純だし、やさしい言葉しか使われていませんが、その内容は深くいろいろ解釈にゆるめるものというものではありません。そこには作者の信念がすべりと詩ではすることはできない、切実さのある感情が込められています。深い感謝があり、悲しみがあり、恐怖があり、恐怖の感情があるのと同時に、深いやさしさがあり、深い喜びがあり、静かなあきらめがあります。それらはいわば、人間の心という対話の舞台になったものなのです。

そういう意味では、作者シルヴァスタインは子供向けの本というかたちを借りてはいるけれど、結局のところ誰のためでもなく、自分自身のために書いたのかって言葉を書いているのだ、と言ってもいいと思います。大人の世界で、上から目線をして何かを語っているわけでは決してありません。そしてそのような世界が、あくまで絵原的にですが、子供たちの心を深くに打つのだと思います（もちろん大人たちが心を打たれてもっとも大きなわけですが）。人の心をかに深く打つのは多くの場合、言葉ではなくて言葉でやるべきものなのです。だからこそ、この小さな絵原物中で多くの人々の中に残られ、何度も何度も読み継がれてきたのでしょう。

あなたが関係やあれ、できたら何度も何度もこの小さな絵を読み返していただきたいと思います。一度ですんなりと理解し、納得する必要はありません。よくわからなくても、つまらなくても、深遠な世界でも、何に惹かれなくてもやるやるとしたものがあとに残ってもも、ひとしずつ、つもりずつと感じても、何が立っても、とにかく何度も読み返してみて下さい。これまで何度読むにわかって、みんながさんな前にこの小さな絵本を読んできたのです。きっと何かがあなたの心に残るはずです。あるいはあるときに残るのはその関係のもうずだけかもしれません、でもそれだってかまわないのです。

この『おおきな木』は原題を "The Giving Tree" といいます。文字通り「与える木」です。このりんごの小さな絵から最後まで、一人の少年に対かを与え続けます。作品文では「母なる」と書かれています。つまり全体なのです。だから言葉づかいも全体的なものにしました。少しの人は この木を母性の象徴としてもとることでしょう。しかしそれはもちろんひとつの解釈に過ぎません。あなたはそこに様ち様様を読み取ることになるかもしれません。それはあなたはあなた次だけにしかわからない、個人的な意味かもしれません。あなたはこの木に何を見ているかもしれません。あなたはこの木に何を見ているかもしれません。それとも少しょうして、何方に何ているかもしれません。あなたはそのものであり、またかやであるかもしれません。あなたがこの物語の中に何を見るかは、もちろんあなたの自由です。それをあえて何度にする必要もありません。そのために物語というものがあるのです。物語は人の心を慰め予自然の場のようなものなのです。

この『おおきな木』はこれまで絵本原作から多国語一部から人の読者に読まれてきましたが、絵原者が時代とゆ、出版社が絶滅して出版を再開することができなくなったという出来ものも、今絵原作からもあることになりました。良く読み続けられた本なので、道筋を辿ればたどれるかも知れないのですが、今回は『おおきな木』という絵本原作をのびのび読みつづけていただきました。

村上春樹
2010年3月